

<後援組織代表挨拶>

昨年度同様、後援組織を代表いたしまして、一言ご挨拶を申し上げます。ご紹介にあずかりました、日本政策投資銀行設備投資研究所の薄井です。本日は、大変素晴らしいイベントにて、こうしたご挨拶の機会をいただき誠にありがとうございます。

今年度のシンポジウムは、企業の「稼ぐ力」の源泉と価値創造の仕組みをテーマとして、当事者である企業、その企業活動を評価する投資家、そして活動全体をそれぞれの立場から推進していく各ステークホルダーの皆様とのディスカッションが多数設定されております。

パネルのタイトルを見ただけでも、昨年度と比較しても着実に進展しているという印象を持ちました。「統合報告」はもはや作成することが目的でなくて、それをいかに利用して企業が各ステークホルダーと対話を進めていくのかという段階に来ていると思います。その意味でも、次の第2回目 WICI 統合報告開示優良企業の表彰が大変楽しみです。

また、今年度のプログラムの中、新たに「DBJセッション」と銘打ちまして、企業の持続的な価値創造を金融面からいかに支援していくのかというテーマで、ディスカッションを行う機会をいただきました。私共がこのようなセッションを企画した理由は2つです。

第1に、現在、国の政策におきましても、『良質なリスクマネーの供給』が大きく注目されています。金融機関としては従来にも増して“目利き力”が問われています。「統合報告」で表現されるどころの「価値創造」をいかに的確に見出していくことができるか、金融機関にとって、ますます重要なテーマになると考えるからです。

第2に、「統合報告」での「資本」の概念と、私共が考える「資本」の概念を共有できないかとの思いからです。設備投資研究所はお陰様で今年設立50周年を迎えることができました。その主要な研究テーマの1つとして、今年9月にご逝去されました、設研顧問であり、東京大学名誉教授の宇沢弘文先生が提唱された「社会的共通資本」という考え方があります。この「社会的共通資本」の概念は、会計制度、企業システム、ガバナンスなどのあり方に大きな示唆を与えます。実は、「統合報告」のフレームワークの中に登場する6つの資本の考え方とも一脈通じるものがあります。会計ディクロージャーの世界においても、より積極的に「社会的共通資本」の概念の展開がみられないかと考えている次第です。

今回のシンポジウムが、ご参列の皆様のみならず、われわれにとっても貴重な学習の機会となることを祈念しています。ご清聴どうもありがとうございました。

以上